Informilo de HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO

Heroldo de HEL

N-ro 94 decembro 2002 – januaro 2003

HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO 北海道エスペラント連盟
ĉe HOŜIDA Acuŝi 〒053-0844
Mijanomori 2-18-18, TOMAKOMAI 苫小牧市宮の森2丁目18-18 星田 淳 方
053-0844 JAPANIO

S-ro Kelly Londoni – Prezidanto.
(klondoni@cccses.org.zw ;
londonibuzege@hotmail.com)

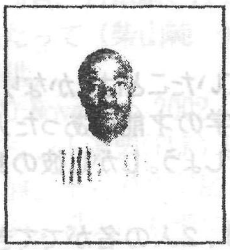
Blaise Matata Byamungu
(Vic-Prezidanto)-
(blaise@usa.com)

Bernard Londoni: Generala
Sekretario
(bernardlondoni@yahoo.fr)

Germain Mukandama – Bibliotekisto
(germain_78@usa.com)

Luboya Biteo : kasisto
(lubiki2002@yahoo.fr)

Vicky Mwadi : Vic-Kasisto
(vmdista@hotmail.com)



Kapinga Ntumba : Konsilisto
(kapingan@yahoo.com)

Eric Alepembwe : Publikaj
Rilatoj (erickabwe@yahoo.com)

La Amikeca Klubo de Hararo (Zimbabvo)

http://www.amikecaklubohararo.8m.net/index.html

旧ザイール＝現コンゴ民主共和国の内戦から逃れたカピンガ・ントゥンバさんたちが、行き着いたジンバブエでエスペラント団体を立ち上げました。ントゥンバさんの手紙は幾度かHeroldo de HELで紹介したことがあります。左下の写真の人です。

AINA LINGVISTO TIRI MASIHO KAJ ESPERANTO

知里真志保とエスペラント

横山　裕之

北海道大学文学部教授文学博士の知里真志保は、明治 42 年に幌別町字登別町（現 登別市）に生まれ、学生時代より一貫して彼の研究を支援した渋沢敬三及びアイヌ語研究の第一人者である言語学者の金田一京助に、そのえい才を認められ指導を受け、アイヌ語の言語的研究を志したアイヌ民族出身のすぐれた言語学者です。昭和 18 年北海道大学に赴任、アイヌ語アイヌ文学を講じましたが、その間日本常民文化研究所より発刊した分類アイヌ語辞典三巻はアイヌ語の本格的研究として朝日文化賞を得たのみならず、高く海外にも評価されました。しかし、昭和 36 年、持病の心臓病のため 52 才で永眠されました。（「知里真志保の生涯」藤本英夫著より）

知里の学問的業績としては、なによりも、アイヌ語の言語学的分析の骨格をほぼ現在の水準にまで高めたことがあげられます。さらにアイヌ語地名研究者の山田秀三との共同調査に基づき、「地名アイヌ語小辞典」（1956）を刊行し、アイヌ語地名研究の深化をもたらしました。また、すでに心臓病が悪化していた昭和 30 年（1955）にも言語学者・服部四郎と共に宗谷・旭川地方のアイヌ語方言調査を行うなど、アイヌ語研究の基礎資料の蓄積に貢献しています。（「アイヌ民族に関する指導アイヌ神謡集の目次資料」（財）アイヌ文化振興・研究推進機構より）

なお、北海道エスペラント連盟でエスペラント訳した「Ainaj Jukaroj」の原本である「アイヌ神謡集」を著した知里幸恵は、真志保の実姉です。

知里とエスペラントの関係について言えば、旧制一高、東大を通じ学友だった松本に、「エスペラントはヨーロッパの言語を標本化したものだ」と、エスペラントの講義をしたり、エスペラントで手紙を書いたというエピソードがあります。また、知里と親交があり、後に義弟となった佐藤三次郎にもエスペラントをすすめたそうです。（「知里真志保の生涯」藤本英夫著　より）

なお、北海道エスペラント連盟の星田委員長より、以下のコメントをいただいていますので、紹介します。

「知里真志保とエスペラントの接点は？

真志保が学生時代にエスペラントを知り使える程度に達していたことは、かなり以前から藤本英夫氏に指摘されていました。誰もが認めるずば抜けた語学の才能のあった人ですから、文法の簡単なエスペラントなら独学でもすぐマスターできたでしょう。しかし彼の身辺を見ると、数人のエスペランチストが浮かび上がってきます。

北海道エスペラント連盟（HEL）が出した Ainaj Jukaroj では、2人の名がでてきます（1989 年版では 101 ページ）。

1人はこのページの文を書いている **松葉菊延**（まつばきくのぶ）。
アイヌ神謡集の1篇をエスペラント訳して La Revuo Orienta 1926 年 10 月号に出したが、詩としての扱い方に迷って「アイヌの学生がいる」と聞き、教えを乞うつもりで訪ねます。真志保が一高～東大の学生だった時代の 1930 ～1935 年の間かと思われます。当然「エスペラント訳したい」との話はあったでしょう。

もう1人はこの松葉と真志保を引き合わせた **宗近真澄**（エスペラント人名辞典では　むねちかしんちょう、松葉の記憶では　むねちかますみ）で、呉海軍工廠から艦政本部に勤務、JEI 評議員も勤めました。松葉は横須賀海軍工廠勤務。真志保は一高時代一時海軍中将宅に

↑TIRI Masiho (ĈIRI Maŝiho) 知里真志保

ミサオは、兄が、たった一字の間違いのためにくしゃくしゃに丸めて捨てた原稿を拾い集め、シワを伸ばして、しまっておいた。それを基にして知里はもう一度書き直すことができた。書きあげた知里は、ミサオに感謝して礼を言った。

「偉いぞ、お前はやっぱり俺の妹だけある」

しかし、「ありがとう、とはいわなかった」と、ミサオは口惜しがる。彼女にしてみると、叱られながら何回も買い替えてきた野紙を、惜し気もなく投げ捨てられるのが、「涙が出るほどもったいなくて」大切にしておこうと思ったのだった。

これほどまでに精魂こめて書いたものだから、その完成稿は、ローマ字にしても日本字にしても実にみごとだった。金田一が、「一字も消さずに、そのまま印刷にしてくれるように」岩波に頼んだほどきれいだった。

これを書いた知里のなみなみならない意気込みがよくわかる。それだけに彼は、この本への愛着が非常に強かった。それだからか、彼は自分で覚え書きした著作目録では、この本の共著者の名をけずっている。

ともあれ、この本は金田一の〈ユーカラの研究〉に付されている『アイヌユーカラ語法摘要』、及び〈金田一選集・アイヌ語研究〉（昭和三十五年）に収められているアイヌ語の文法とともに、アイヌ語法の白眉である。

128

一高に入ったときには、英語やドイツ語と同じ「外国語」だった知里のアイヌ語は、大学の後半になると、その卒業論文を師の金田一が「内容について全責任を負う」と、言うほどになった。

知里は空閑光治に、「外国語を忘れないように覚えるには、語原分析をしながら、そして英語ではこう、ドイツ語ではこう、と比較しながらやるといい」と、そのコツを教えた。また松本には、「エスペラントはヨーロッパの言語を標本化したものだから」と、エスペラントの講義をしたり、エスペラントで手紙を書いたりした。佐藤三次郎にもすすめた。

アイヌ語もやはり同じようにして覚えたらしい。大学三年になって、知里は金田一に代わってアイヌ語の講義をしたことがある。「今日は俺がやるから聞きにこい」と、松本に誘いをかけて、いささか彼は得意顔であったが、その内容は、「機知縦横でみんなを笑わせながら……学生のあいだでは」金田一よりも人気があった（〈週刊朝日〉・『問答有用夢声対談』）。学生と一緒になって聞いていた金田一は、「ああ、それは新説です」と、大きくうなずき、その態度は非常に謙虚にみえた（松本談）。

常識を押し破る闘争的強引さ

一高から東大までの間、深瀬への反駁文や、〈アイヌ民譚集〉、〈アイヌ語法概説〉などに集約

129

住み込んでいましたから、その関係での接触があったか、と推定されます。
あと一人は真志保が尊敬していた日本民俗学の開拓者、柳田国男です。彼がエスペランチストでJEI役員でもあったことは、今は忘れられているようですが。もちろんこの人たちが真志保のエスペラント学習とどんな関係があったかは、今となってはわからぬ昔のことになりました。」

知里は、樺太に住んでいた時代に、「アイヌ語法研究 — 樺太方言を中心として」（1942年）という論文を出しました。この中の凡例には、アイヌ語のローマ字は、従来の慣用である英語式を一部改めて、ch の代わりに、c に谷形の字上符記号（ˇ）を付けた文字č（キャロン付き c ）を、sh の代わりに、s に谷形の字上符記号（ˇ）を付けた文字š（キャロン付き s ）を、w の代わりに、u に皿形の字上符記号（˘）を付けた文字ŭ（ブリーブ付き u ）を、y の代わりに、j を用いると書かれています。知里は、この時期を中心に一定の期間、このようなアイヌ語のローマ字表記をしていました。

また、1944 年の「樺太庁博物館彙報」の中の「樺太アイヌの説話」を見ると、知里自身の肉筆によるこれらの字上符文字がある説話採録メモを見ることができます。

なお、この論文の音韻論の子音の項を見ますと、以下のようなことが書かれています：

。。。破擦音（affricate）č（キャロン（谷形記号）付き c ）は時に対応の有声音。。。ĵ［［ヂ］の頭音 -「サーカムフレクスアクセント付き j 」（j に山形の字上符記号（ˆ）を付けた文字）］として現れる。しかしこれらは同じ音韻の異なる音声的実現にすぎない。清濁によって意味に差を生じる語は一つもない。清濁はアイヌ語においては音韻的対立を成さないのである。
s（シを除く「サ行の頭音」）は、š（キャロン（谷形記号）付き s - シャの頭音）として現れる。しかしいづれも同じ音韻の異なる現れにすぎない。北海道ではšもかなり多く用いられるが、樺太では s が普通である。しかし樺太でも母音 -i に先立つ場合は口蓋化して常にšであり、また音節の尾音に立つ時も多くšである。

これらをまとめると、以下のようになります。すなわち、知里氏のある時期の一連のアイヌ語のローマ字表記は、エスペラントの影響を受けているものと推察されます。

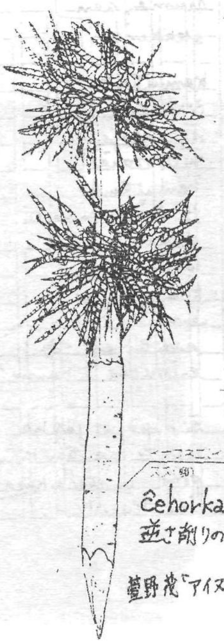
（1）知里は、エスペラントの講義をしたり、エスペラントで手紙を書いたりしていたことがあるということ。

（2）č、š（キャロン（谷形記号）付き c 及び s ）という文字は、エスペラントの文字ではないが、谷形の字上符文字ˇを、山形の字上符文字ˆに変えるとエスペラント固有の文字ĉ、ŝ（サーカムフレクスアクセント（山形記号）付き c 及び s）となり、これは凡例にあるč、š（キャロン（谷形記号）付き c 及び s ）の定義にある英語式ローマ字表記にそれぞれ対応するということ。*

（3）y の代わりに、j を用いていて、これは、エスペラントと同じであるということ。

（4）w の代わりに、エスペラント固有のŭ（ブリーブ（皿形記号）付き u ）という文字を用いているということ。

（5）č（キャロン付き c ）に対応する有声音の説明で、エスペラント固有の ĵ（サーカムフレクスアクセント（山形記号）付き j ）という文字を取り上げているということ。この文字ĵは、エスペ



Ĉehorkakep
逆さ削りのイナウ
萱野茂「アイヌの民具」より

「アイヌ語法　樺太方言を中心として」の凡例 →

凡　例

1. 印刷の都合で，アイヌ語の表記に，片仮名をかなり多く用ひた。ただ，アイヌ語は日本語とちがつて閉音節をふんだんに用ひるので，開音節文字の片仮名では充分にこれを表記することができない。また，tu, je(＝ye), ŭe(＝we), ŭo(＝wo), 等現代の標準日本語に欠けてゐる開音節もあるので，それらを片仮名で表記するためには一応の工夫を必要とする。そこで本稿に於ては，片仮名の用ひ方に，次のやうな約束を設けた。(イ)閉音節の尾音 -p, -t, -k, -š, -ŭ, -j, -m 等はそれぞれ片仮名のプ，ツ，ク，シ，ウ，イ，ムを語中の他のものよりも小さく印刷して示した。カプ＝kap 皮。マッ＝mat 妻。シク＝sik 目。ウパシ＝upaš 雪。アウ＝aŭ 舌。ライ＝raj 死ぬ。サム＝sam 側。(ロ)尾音 -r は直前の母音の音色に従つて小さいラ，リ，ル，レ，ロで示した。カラ＝kar 造る。ピリ＝pir 傷。ルル＝rur 海水。ペレケ＝perke 割れる。コロ＝kor 持つ。(ハ)尾音 -x は直前の母音の音色に従つて小さいハ，ヒ，フ，ヘ，ホで示した。マハ＝max 妻。シヒ＝six 目。クフ＝kux 帯。テヘ＝tex 手。オホ＝ox 槍。(ニ) tu, je, ŭe, ŭo はそれぞれトゥ，イェ，ヱ，ヲで表はした。

2. アイヌ語のローマ字表記に於ては，従来の慣用である英語式を一部分改めて，ch の代りに č を，sh の代りに š を，w の代りに ŭ を，y の代りに j を用ひた。

ラントでは、ĉ(サーカムフレクスアクセント(山形記号)付き c)に対応する有声音の文字であるということ。

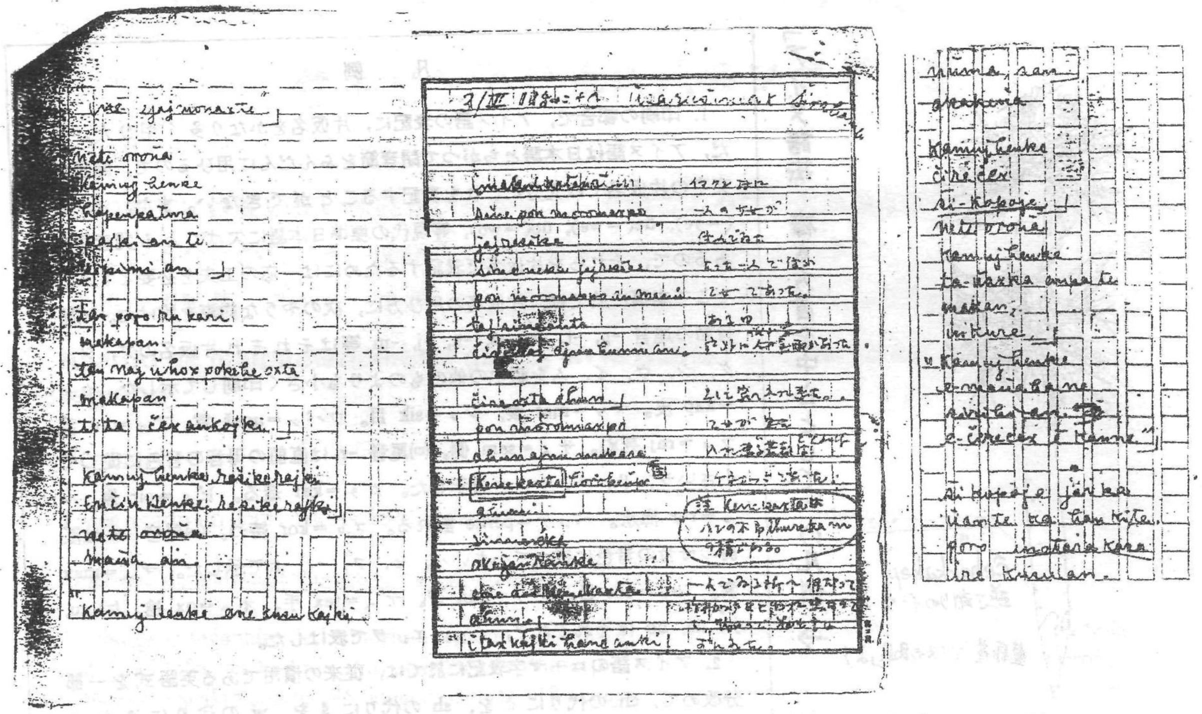
*č、š(キャロン(谷形記号)付き c 及び s)という文字は、エストニア語、クロアチア語、スロバキア語、スロベニア語、ソルビア語、チェコ語、フィン語、サーミ語、ラトビア語、リトアニア語などで用いられる文字です。これらの言語の多くは、これらの文字に対して、それぞれ、英語式の ch, sh というローマ字表記に対応する音価を持っています。(「言語学大辞典　別巻　世界文字辞典」三省堂より)

č、š(キャロン(谷形記号)付き c 及び s)は、エスペラントの文字ではありません。しかし、この文字の谷形の字上符ˇを、山形の字上符^に変えると、エスペラント固有のĉ、ŝ(サーカムフレクスアクセント(山形記号)付き c 及び s)という文字になります。これらは、前述のč、š(キャロン(谷形記号)付き c 及び s)という文字の定義にある英語式の ch, sh というローマ字表記に対応します。

また、知里氏の論文で論じられている「čの有声音である- ĵ」は、エスペラント固有の文字です。čと異なり、エストニア語、クロアチア語、スロバキア語、スロベニア語、ソルビア語、チェコ語、フィン語、サーミ語、ラトビア語、リトアニア語などでは用いられません。

なお、参考までに紹介しますと、
『新版　音韻論と正書法』(服部四郎著、大修館書店、1979 年)に、
「TRAGER-BLOCH の音韻論の中に、英語の子音フォネームとして、č、šを含む 24 を認めている」という記述があり、キャロン(谷形記号)付きローマ字が使われています。これは、英語式の ch, sh というローマ字表記に対応する音価に相当します。

※フォーネム(phonem)とは、言語学用語の「音素」のことです。言語学をご存じの方は承知していると思いますが、「音素」とは、ある言語の形式と形式とを音(オン)の上で区別すると解釈される最小単位のことです。



樺太時代のフィールドノート。　たとえば tan naj ŭhox pokehe oxta は
タン　ナイ　ウホッ　ポケヘ　オッタ　と読む。

El " Amoraj Anekdotoj de aino " de TIRI Masiho 知里真志保「アイヌ艶笑談」より

Ĉasista Rakonto　狩人ものがたり

Traduko : KABAYAMA Yûsuke　訳：樺山　裕介

Serioza homo ne legu　まじめな人は読まないでください

Unu el la karakteroj de ainaj rakontoj estas ke la ĉefa rolulo mem parolas sian sperton---nome rakonta stilo de la unua persono. La ĉi tiea prezentata fabelo apartenas al tia stilo. La malnormalajn sperton kaj senton de la unua ĉasado de fratoj konfesas la pli aĝa el ili mem.

Mi havas la malpli aĝan fraton. En iu tago li diris al mi,
" Kara frato mia! Mi opinias ke ni jam kreskis tiel aĝaj ke ni povus ĉasi en montoj. Bonŝance hodiaŭ vetero estas bona, do ni duope iru kapti urson! "
Mi konsentis. Pare ni marŝis profunden kaj profunden laŭ la vala rivereto aparta de la vilaĝo. Sur ambaŭ flankoj de mallarĝa valo kreskis bambuetaj arbedoj, kaj ĉe la fino de la valo troviĝis kaverno de urso. Atinginte la truon mia frato diris,
" Fraĉjo! Ĉu vi eniros la kavernon kiel atakanto kiu kondukos la urson eksteren? Aŭ atendos ĝin apud la enirejo kiel embuskulo? "
Post iom da pripenso, mi respondis,
" Mi aŭdis la praavan diron, ke embuskulo devas esti pli kompetenta ol atakanto por eviti danĝeron. Mi estu enbuskulo kaj atendos apud la truo. Frato juna, vi eniru la truon!! "
La frato kuraĝe emocie sturmis internen. Tuj baldaŭ supozeble li komencus lukton kun urso en la kaverno, abunda bruo fulmis, mondo krias, ĉio tremis, mi fariĝis preskaŭ surda. Baldaŭ la sonoj tute malaperis, la ĉirkaŭo eksilentis. Mi ĉirkaŭpaŝis preter la truo kun maltrankvilo prizorgante la sorton de la frato. Do iu balanciĝanta eliris el la truo. Ho mia fraĉjo, ĉu vi vere estas tiu, kiu vigle ensaltis la truon? La tuta korpo estas malseka, la buŝo elverŝis ŝaŭmon, kvazaŭ la ostoj kaj muskoloj estus elpinĉitaj, ŝajne li ne povis eĉ elparoli tiel laca. Tiam eĉ mi profunde konsideris, ke trua ĉasado estas terura.
---Ĉi tiel, rememorinte kaj tremante samkiel tiam, la testiko rakontis.

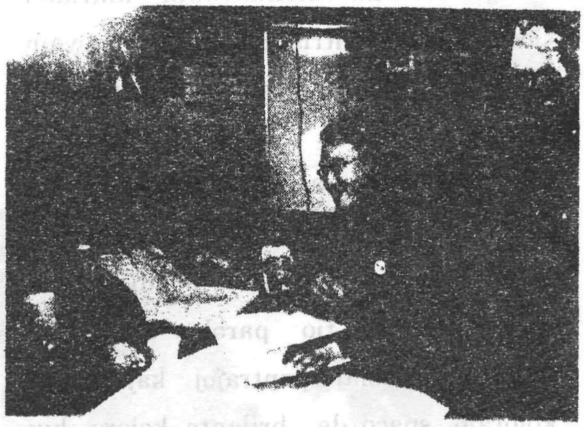
Novjara Kurso 2003

2003年新年講習会

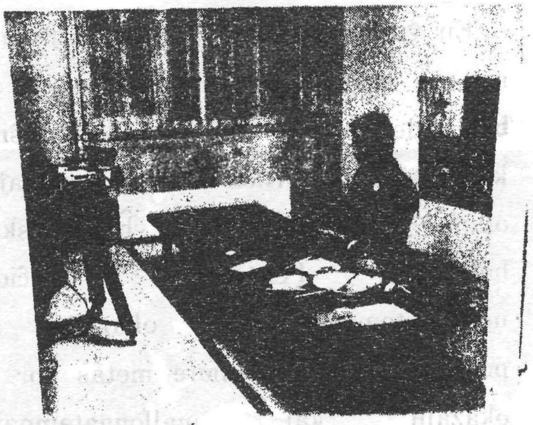
Ni kreas propagandan filmon por/per/pri/de Esperanto. La partoprenantoj proponis ideojn de la filmo, kaj decidis la enhavon, kaj fotis scenaron en vidbendo. Ĝis la printempo kompletiĝos la vidbendo de HEL.

2003年1月12日（日）-13日（月・成人の日）、札幌市、ロンデタージョで北海道エスペラント連盟の宣伝ビデオの撮影をしました。撮影には、編集会議に来た日本青年エスペラント連絡会の人たちに協力していただきました。ただいま編集中です。（樺山）

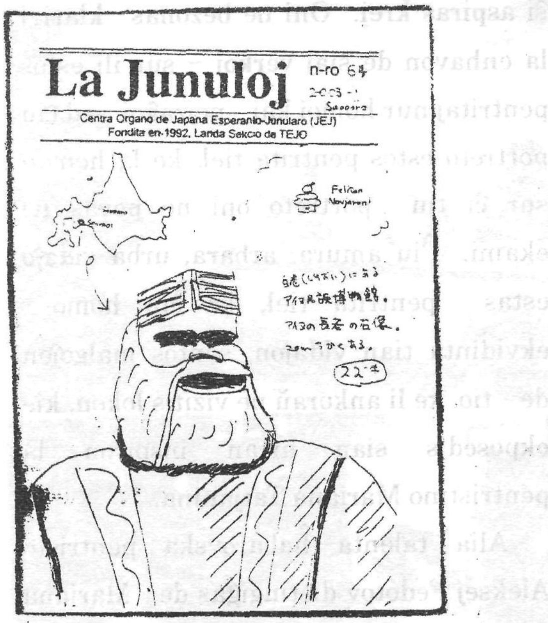
雪中ジンギスカン



La Junuloj誌の編集風景



ただいま撮影中



北海道に来た青年たちがつくった日本青年エスペラント連絡会会誌「La Junuloj」

ĤABAROVSKAJ PENTRISTOJ ハバロフスクの画家たち（1）

Mihail KORĈMARJOV

Nian artikolon pri ĥabarovskaj pentristoj ni volus komenci de jubilea temo. Antaŭnelonge sian kvindekjaran jubileon festis tre antaŭlonge veninta el Leningrado en Ĥabarovskon larĝe konata ĥabarovska pentristino Mariana Tatjanina. La pentristino festis sian jubileon tiel, kiel ĉiam faras veraj pentristoj ~ per sia persona ekspozicio. Sed la ekspozicio, tamen, ne iĝis rezulta, tutenhavanta Mariana Georgievna montris nur siajn novajn verkojn. Plimulto da ili estis pentritaj je lastaj tri jaroj. Kial? Mariana Grigorjevna opinias ke ŝiaj fruaj verkoj ne harmonias kun ŝia nuntempa mondkoncepto. Sed ĉi tiu mondkoncepto estas ĝoja. Pri tio parolas romantika enhavo de ŝiaj pentraĵoj kaj libera koloraĵo, spaco de brilanta koloro, kiu aspiras eliri malantaŭ mallarĝajn limojn de konturoj kaj limoj.

En ĉiu sia bildo Mariana Tatjanina aspiras trovi neordinaran ŝlosilon al beleco de l'mondo. Tial ĉiam floriĝos ŝiaj koloroj, ĉiam brilos sur ŝiaj pentraĵoj okuloj de ĥabarovskaj belulinoj. Pentrante ĉion mallongtempan kaj okazan, la pentristino neniamaniere metas por si okazajn kaj mallongatempajn celojn. Siajn artajn figurojn ŝi sendas en estonton. Ŝia kreado adresas ne al logiko sed al sentoj. Kun ĉi tio Mariana ne metas gravajn taskojn antaŭ tiuj, kiuj rigardas ŝiajn bildojn, ŝi prarolas kun homoj per la lingvo, kamprenata al ili. Eble, tial ni vidas en ŝiaj bildoj influon de grandaj rusaj majstroj ~ Kuinĝi, Savrasv, Grabarj, Levilan. Ne malsimplado de la mondo, sed ĝia poetikado, ne analizo de l' estonto sed ĝia lirika, harmonia priskribo ~ tio estas ĉefa artverka kreado de Mariana Tatjanina. Kvankam ŝiaj pentraĵoj estas ete temsama ~ la pentristino pentras vidaĵojn kaj portretojn ~ sed ŝi ĉiam konas koncepti ĝis fino tutan ĉion, kion ŝi aspiras krei. Oni ne bezonas klarigi la enhavon de ŝiaj verkoj ~ sur ili estos pentritaj nur homoj kaj pejzaĝoj, sed ĉiu portreto estos pentrita tiel, ke la homon sur ĉi tiu portreto oni ne povas ne ekami. Ĉiu amura, arbara, urba vidaĵo estas pentrita tiel, ke ĉiu homo ekvidinta tian vidaĵon, sentos malgoĵon de tio, ke li ankoraŭ ne vizitis lokon, kie ekposedis sian artan inspiron la pentristino Mariana Tatjanina.

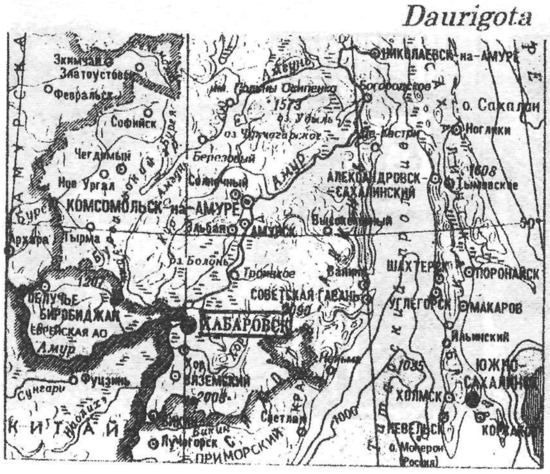
Alia talenta ĥabarovska pentristo Aleksej Fedotov distingiĝas de Mariana Tatjanina per tio, ke li ne ricevis (eble ne volis ricevi) plenan artan instruecon kaj ne senprokraste faris definitivan elekton

je sia vivo. Nur lekcioj de lia patro (ankaŭ bona pentristo) kaj laboro en klubo por ĉiam faris lin pentristo. Sen en 70 jaroj vivi per artaj laboroj por nemerita, sentitola pentristo estis tre malsimple, malfacile. Kaj serĉante iom monon Aleksej Fedotov traveturis tutan Malproksiman Orienton: Saĥalinon, Kamĉatkon, Suban Amuron. Post liaj vizitoj restis multaj marpentraĵoj en klubo kaj muzeoj, sed krom tio simplaj pentraĵoj. Fruaj verkoj iĝis fundamento por multaj maturaj kreaĵoj de la pentristo. Ĉi tiam li ankaŭ laboras aktive ~ por si kaj por mondo. Verkoj de Aleksej Fedotov estas aĉetataj de multaj homoj ~ ne nur en Rusio. Tri vidaĵoj de la pentristo nun troviĝas en privataj kolektoj de parizanoj. Oni povas vidi liajn pentraĵojn en Izraelo, Hispanio, Ĉinio, Suda Koreio, Japanio, Argentino. Sed la pentristo havas ankoraŭ unu revon ~ skribi memorliboron pri sia patro. Kaj ni scias certe ke la pentristo bezonas sian personan ekspozicion, ne nur pro sia reputacio, sed pro memoro pri sia patro, malferminta por li vojon en maltrankvilan maron de artverkado. Kaj ĉi tiu vojo estu longa kaj plena de sukcesoj !

Sed ni neniamaniere povas en la artikolo pri ĥabarovskaj pentristoj silenti pri unike talenta homo kaj pentristo, honora civitano de Ĥabarovsk Gennadij Pavliŝin. Je iu delonga tempo multaj loĝantoj de disĵetitaj en Amuraj provincoj, nanajaj, nivĥaj, ulĉaj vilaĝoj, ofte rememoris rusan fraŭlon, kiu kun malofta atento rigardis sur superveston de amuraj aborigenoj, rapide pentris portretojn de tiulokaj virinoj en naciaj vestaĵoj kaj ĉiuvespere aŭskultis tiulokajn legendojn kaj kantojn. Tiu fraŭlo estis studento de Vladivostoka arta lernejo Gennadij Pavliŝin.

Ankoraŭ je lasta lernjaro Palvliŝin partoprenis en esplorfosado de baĥaja templo. Post tio li laboris dum kvin jaroj en laboratorio de Malproksimorienta departemento de la Akademio de Sciencoj de UdSSR. Por ke ni povu imagi al si amplekson de laboro, farita per la pentristo, ne diru ke li faris dum ĉi tiu tempo preskaŭ dudek milojn da pentraĵoj. Sur ĉi tiu fundamento li pli forte kreis unikajn sciencoartajn kompoziciojn. "Brilanta mondo de koloroj kaj linioj, romantismaj aspiroj, ĝusteco de enkorpigo de detaloj de vivo kaj kulturo" ~ tiel parolis pri verkoj de Gennadij Pavliŝin akademiano ~ etnografo A.P. Okladnikov.

Daurigota

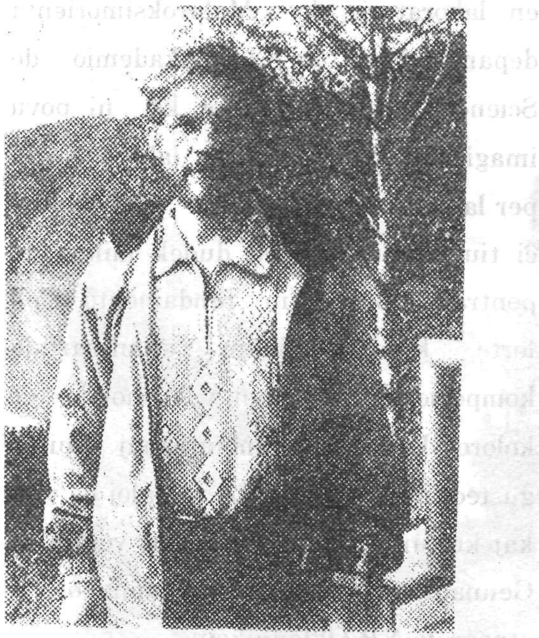


Scale 1:15 000 000

Fotoj de la 66a Hokkajda Kongreso de Esperanto
第66回北海道大会写真集 2002

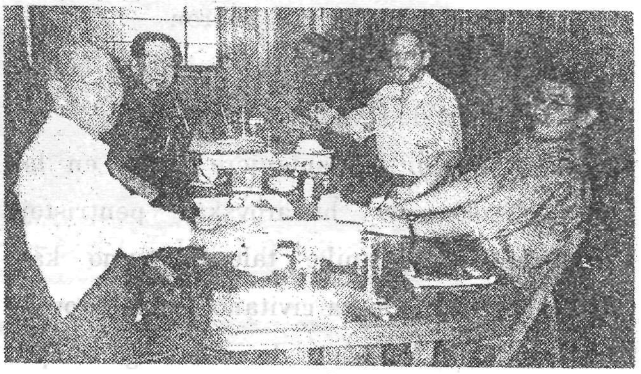
Karaj foraj ajnu-aj amikoj kaj amikinoj – homoj de Tero!
Gratulojn okaze de Novjaro 2003
Multe da feliĉo kaj prospero.
de Valerij
25 decembro 2002j.

Ekhavu ĉiuj gajon, celebru kun ĝoj'!
Dancu neĝfloketoj rondodancon
La 2003-a jaro estas sur la voj'!
Amon, riĉecon kunportos ĝi
kaj sanon!

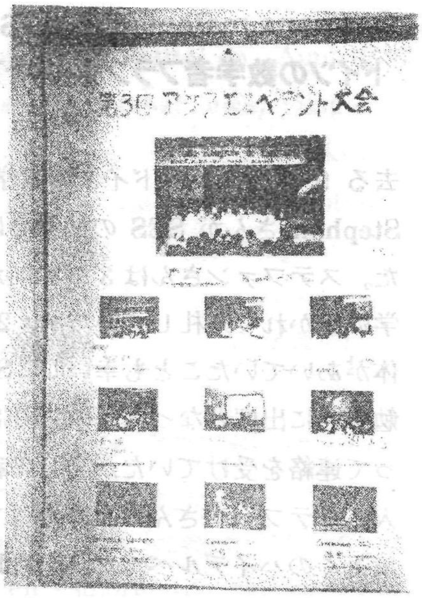


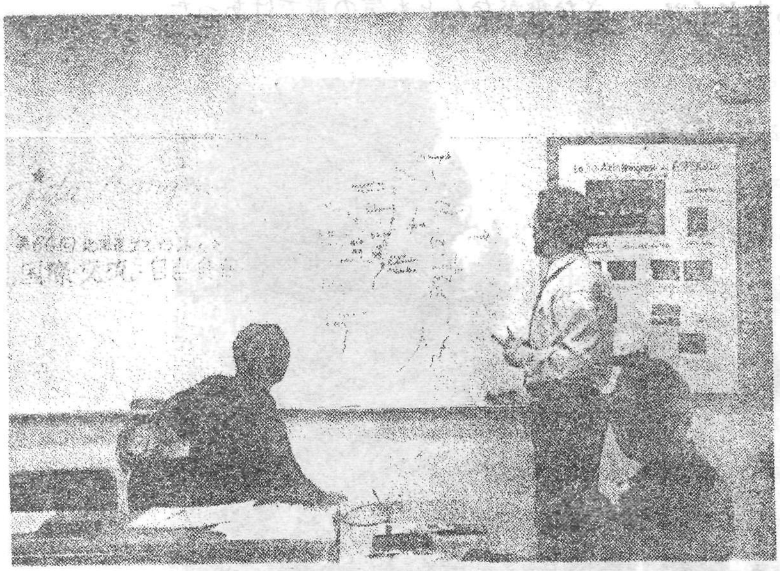
↑ Novjara karto de s-ro Valerij Paravin al aina familio, kiu gastigis lin

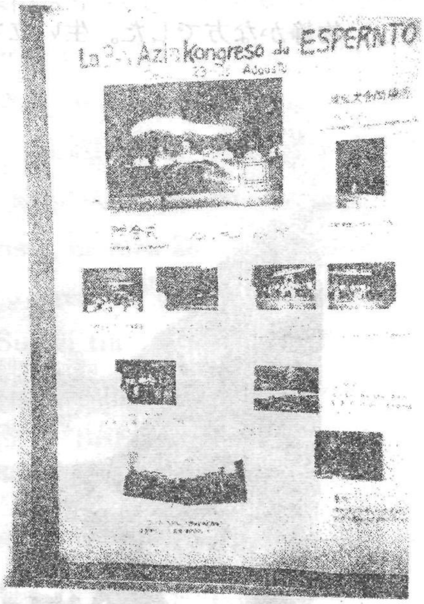
← S-ro Paravin
↙ Kafejo « DOMO », en kiu ni bankedis
↓ Interno de « DOMO »



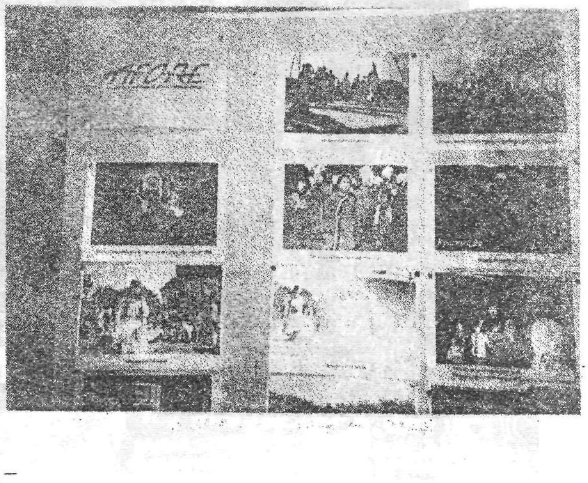
De maldekstre: s-ino IWAMA Yôko; s-ro Esaman(lutro) prezidanto kaj s-ino SAKAMOTO Zyunka







S-ro Paravin parolis pri indiĝenoj apud riveregoj



Germana matematikisto, S-ro Frank Stephan en Sapporo GOTOO Yosiharu

ドイツの数学者フランク=ステファンさんの札幌来訪

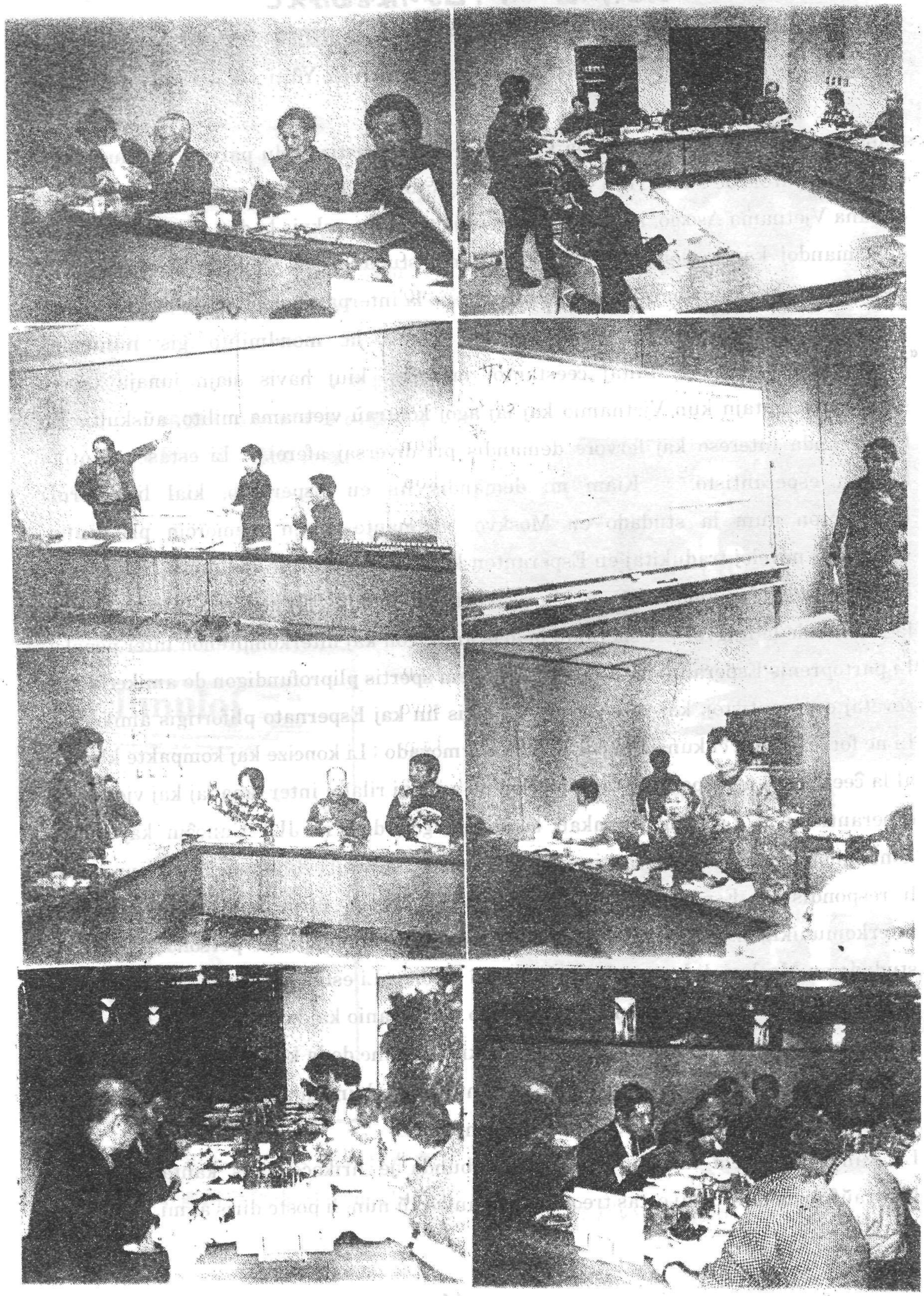
後藤　義治

去る９月２８日、ドイツの数学者 Frank Stephan さんが SES の勉強会に顔を見せた。ステファンさんは３日程前から札幌大学に招かれて来札していたが、28 日（土）体があいていたことも幸いし、SES の定例勉強会に出席となったもの。SES では前もって連絡を受けていたが当日の参加者は８人。ステファンさんの出身地はフランス国境近くのハイデルベルグ、年令は 30 代で背は非常に高く 190 センチを越える、学者らしい物静かな方でした。生い立ちやドイツの現状など聞きながら、お互いに自己紹介や歌などを歌い、3 時半すぎまで交流した。日本語での会話はありませんでしたが、かなりの理解力はあるようでした。例会後はいつものレストラン「ブルーデル」で夕食を共にしたが、彼は Vegetarano でメニューは取り合わせで作ってもらった。Vegetarano になった理由は８才の時、buc^ejo を見てしまったとのこと。この日はあいにく大雨で大きな体に似合わない小さな傘がなんとも気の毒ではあった。

ステファンさんの HP より　スイスにて

http://www.math.uni-heidelberg.de/logic/fstephan/index.html

Zamenhofa Festo de Sapporo-Esperanto-Societo 2002.12.14



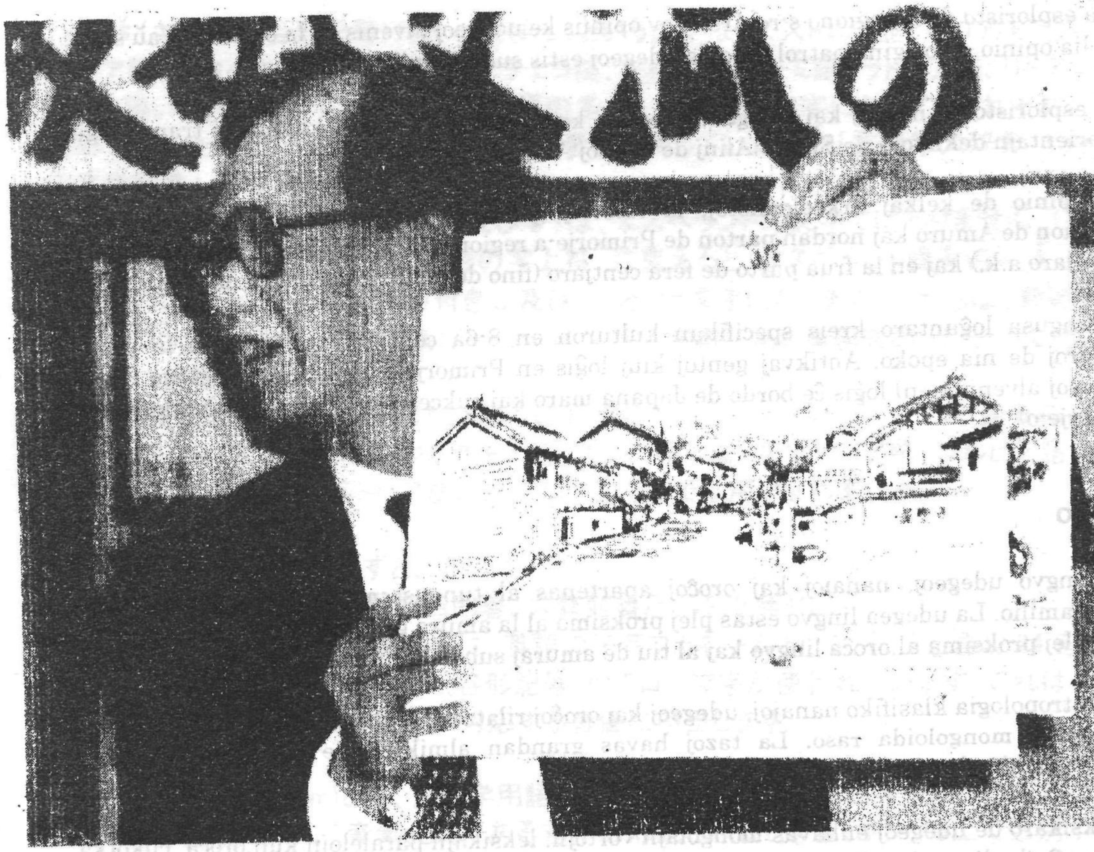
Kunsido por bonvenigi amikon el Vjetnamio, la lando de poemoj kaj bambuoj

詩と竹の国　ベトナムより友をむかえて
チャン・クアン・ゴクさんの帯広訪問

SAWAYA Yûiti　沢谷　雄一（帯広市）

Raportas Sawaya Yûiti, ĉeestis la kunsidon, kiu konsistis el du partoj : la unua parto estis interparolo de s-ano Tran Quan Ngoc kaj s-ro SATOO Mituo, tutlanda direktoro de Japana Vjetnama Asocio, kaj post 15 minutoj da ripozo, sekvis la dua parto en la formo de"demandoj kaj respondoj." Juna vjetnamo studanta en Obihiro-Universitato de Agrikulturo kaj Veterinara Medicino interpretis la interparolojn en la kunsido. Temo variis de la invado de japana armeo antaŭ la mondmilito ĝis nuntempa "Doimoi" (Reformo). Multaj ĉeestantoj mezaĝaj, kiuj havis siajn junajn tagojn senescepte ligitajn kun Vjetnamio kaj iaj agoj kontraŭ vjetnama milito, aŭskultis lin kun granda intereso kaj fervore demandis pri diversaj aferoj. Li estas aŭtentika konscia esperantisto. Kiam mi demandis lin en Esperanto, kial li eklernis Esperanton dum la studado en Moskvo, aldonante miajn memorojn pri multaj vjetnamaj noveloj tradukitaj en Esperanton kaj eldonitajn el Fremdlingva Eldonejo en Hanoi dum la vjetnama milito. Lia respondo estis klara ; lin altiris la interna ideo de la kriento de la lingvo. Esperanto helpas amikigon kaj interkomprenon inter popoloj. Li partoprenis Esperanto-movadon tie kaj mem spertis pliprofundigon de amikecoj kun sovetaj esperantistoj, kaj vere ili multe helpis lin kaj Espernato plifortigis amikecojn. Li ne forgesis tiun ĉi kunsidon por Esperanto-movado ; Li koncize kaj kompakte klarigis al la ĉeestantoj ne esperantistaj historion de amikaj rilatoj inter japanaj kaj vjetnamaj esperantistoj. Li menciis ankaŭ la sinbruligon de s-ro JUI Ĉunoŝin kaj nunan kontribuon de japanaj esperantistoj al la konstruo de Brajla Biblioteko. Komprenehle, li respondis en Esperanto kaj mi interpretis. Multaj miris kaj enviis la rektan interkomunikiĝon. S-ano Tran Quan Ngoc estas talentoplena persono. Dum lia studado en Moskvo, li komencis studi ankaŭ arton. Li estas pentristo. Li montris al ni multajn skizojn desegnitajn dum la vojaĝo tra Japanio kaj kompletigitajn akvarelojn pri vjetnamaj pejzaĝoj. Li estas bona muzikisto. Fine de la kunsido, li prezentis al ni vjetnaman kanton " Banbufluto" en Esperanta versio kun sia akompano de gitaro. Li plenumis tre bonan propagandon pri Esperanto !

La kanto kun bela melodio kaj poemo abunda je lirikeco estis kantata dum la kontraŭfranca milito kaj estas tre pupulara ankoraŭ nun, li poste diris al mi.



極東ロシアの先住民族ウデゲ ①

Valerij PARAVIN

この原文には長い長い前置きがあります。そのこころは、大規模な交信技術が急速に発達している今だからこそ「文化の対話」がますます急務だということらしいです。同じ題材の黒沢明監督「デルス　ウザーラ」に魅せられたパラヴィンさんの力作をどうぞ。

Kvanto de malmultenombraj gentoj en la Rusia For-Oriento kaj en Primorje-a regiono

Nombroj

La censado en 1897 fiksis 1842 udegeojn. Tiu en 1989 fiksis 907 udegeojn.

Distribuo de malmultenombraj gentoj en Primorje-a regiono

La indiĝena loĝantaro de Primorje-a regiono konsistas el udege-oj, nanaj-oj, oroĉ-oj kaj tazoj. Plejparte la indiĝenoj loĝas en 4 administraj distriktoj de Primorje-a regiono. Terneja distrikto 112 udege-oj, 1 oroĉo. Pojarskij distrikto entute 785 udegeoj, entute 118 nanajoj, 15 oroĉoj (entute 16); Krasnoarmejskij distrikto 122 udege; Olginskij distrikto 204 tazoj.

Skiza historio de udegeoj

Memnomiĝo

Rusa esploristo de la regiono s-ro Arsenjev opiniis ke udegeoj alvenis de la okcidento aŭ sudo. Laŭ lia opinio, la origina patrolando de udegeoj estis suda Manĵurio.

Alia esploristo de nordaj kaj indiĝenaj popoloj konsideris ke udegeoj kaj oroĉoj transloĝiĝis sur orientajn deklivojn de Sihote-Alinj de riveroj Amuro kaj Ussuri.

Laŭ opinio de kelkaj arkeologiistoj, la siberiaj gentoj de tungusaj ĉasistoj penetris la teritorion de Amuro kaj nordan parton de Primorje-a regiono en la fino de neolitiko (fino de la 2a miljaro a.k.) kaj en la frua parto de fera centjaro (fino de la 2a miljaro – 1a miljaro a.k.).

La tungusa loĝantaro kreis specifikan kulturon en 8-6a centjaroj a.k. kaj en la unuaj centjaroj de nia epoko. Antikvaj gentoj kiuj loĝis en Primorje-o kaj Amura regiono (kiam tungusoj alvenis tien) loĝis ĉe bordo de Japana maro kaj sukcesis atingi lagon Khanka (suda Primorje-o).

Lingvo

Laŭ lingvo udegeoj, nanajoj kaj oroĉoj apartenas al tungusa-manĵura grupo de altaja lingvofamilio. La udegea lingvo estas plej proksima al la amura grupo de tungusaj lingvoj. Ĝi estas plej proksima al oroĉa lingvo kaj al tiu de amuraj subdialektaj de nanaja lingvo.

Laŭ antropologia klasifiko nanajoj, udegeoj kaj oroĉoj rilatas al Baikala tipo de nordazia raso de granda mongoloida raso. La tazoj havas grandan almikson de ĉinaj kaj manĵuraj antropologiajn elementojn.

La leksikaro de udegeoj enhavas mongolajn vortojn, leksikajn paralelojn kun oroĉa, ĉukotka kaj kamĉatka lingvoj.

Lingvistikaj esploroj diras pri tio fakto ke pragentaj lingvoj influis la fonetikon de tunguslingvaj popoloj. La influo de aina lingvo al la tungusaj lingvoj estis rimarkebla. La udegea lingvo influis la nivĥan lingvon. Kelkaj udegeaj loknomoj estas netradukeblaj, kio indikas ekziston de netungusaj aborigenoj en la antikveco en tiu regiono.

La etnika historio de nunaj popoloj de Ĉe-Amura kaj Primorje-a regiono estas ligata kune kun la historio de la tungusa loĝantaro de Ĉe-Bajkala region, de kie, kiel indikas multaj scientistoj, komencis migrado de tungusoj al rivero Sungari, Amuro kaj Ohotska marbordo.

Evenoj, kiuj antaue forpremis korjakojn, okupis la nordan parton de Ohotska marbordo. Poste ili estis nomitaj de najbaraj popoloj kiel "tungusojn", aŭ lamutojn, t.e. loĝantojn de marbordo. Tempopunkto, kiam tungusoj eliris al Ohotska marbordo, estas 300 aŭ 500 jaroj antaŭe.

Laŭ opinio de Fororienta historiisto Larjkin, la udegeoj inkludis ankaŭ paleoazianojn (ankaŭ nivĥojn), sudajn kaj nordajn tungusojn, ainajn kaj solonajn (ĉina minoritato) elementojn.

Udegeoj nomis sin *u'de, udi'he, ude'he, ude'ge*; la pluralo de popolnomo estas *udəziga*. La udegeoj kiuj loĝis ĉe bordo de Japana maro, nomis sin kiel *u'de-na'muka*, kaj loĝantoj de riverkomencoj nomis sin *u'de-de'inka* (' estas akcentosigno antaŭ akcentita silabo).

La najbaraj popoloj konis udegeojn sub diversaj nomoj: ĉinoj nomis ilin *yui-phi-dtazi* (*tazi*), kio signifas fislederaj alilandanoj aŭ homoj, kiu vestigas je vestajoj el fisxledero. Koreoj nomis udegeojn *ucxika*,
manĵuroj nomis ilin *'kjakala*, *'kekari*.

Udegeoj konis pri nivĥoj (*bosa*), mongolianoj (*mongo*), manĵuroj (*manzi*), ĉinoj (*ninka*), japanoj (*se*), koreoj (*gauli*) kaj rusoj (*lusa*).

Antikvaj udegeoj konis pri ainoj. La udegeoj kiu loĝis ĉe rivero Anjuj nomis ilin **aini kui** ("kui, kiu almigris"). Estas konate, ke tungusolingvaj popoloj uzis vorton *kui* por ainoj.

Priskribo de la udegea lingvo

La udegea lingvo ne havas skribsistemon. Laŭ ĝia leksikaj kaj gramatikaj specifikajoj ĝi estas proksima al amura grupo de tungusaj lingvoj, precipe al orocha subdialekto kaj nanaj-a de riverkomenca parto de Amuro. Speca nomo de hundo en tungusa-manjuraj lingvoj estas termino *nina-inda*. En evenka lingvo ĝi estas esprimata kiel ina, en nanaj-a inda, en la oroĉa inaki. Ĉi-tie traktataj formoj estas similaj al la japana *inu* (hundo). Lingvistoj inklinas konsideri ke simileco ne povas esti rezulto de pruntepreno. Evidente, ke tiu vorto havas komunan antikvan originon.

Dum la 19a jarcento la carisma registaro ne zorgis pri la skribsistemo de udegea lingvo. En 30aj jaroj de la 20a jarcento dum la Soveta regado oni komencis krei alfabetojn kiel por multenombraj nacioj tiel por malmultenombraj nacioj kaj popoloj (interalie por cecena). En 1932a jaro oni aprobis projekton de udegea skribsistemo.

Oni eldonis udegean–rusan vortareton kun plena gramatika suplemento. La unua vortaro estis latinigita kaj havis kelkajn rusajn prunteprenitajn vortojn.

La rusoj estis unuaj kiuj realigis politikon de egaleco de ĉiuj popoloj sur teritorio de eksa granda Rusia imperio kaj faris praktikajn mezurojn por subteni udegeojn sur pli alta kultura kaj socia nivelo. Ekzample, ĉinoj praktikis nur ĉinlingvan instruadon kaj edukadon inter udege-oj. Aparte ili ne estis (baptitaj) kristanigitaj.

Soveta registaro helpis laŭeble krei tiel nomatajn naciajn lernejojn. Tio ne estis senproblema procezo, se oni konsideru ilian antaŭan vivmanieron. Tiun aspekton ni tusu iom poste.

副詞は、動作や状態の様子や、場所、時、手段などを表す単語で、動詞や形容詞や副詞を修飾します。たとえば、動詞であれば、

Li trankvile dormas.　彼は、安らかに眠っている。

La rivero rapide fluas.　その川は、速く流れている。

形容詞であれば、

Li estas morte malsata.　彼は、死ぬほど空腹です。

Esperanto estas facile lernebla.　エスペラントは、簡単に学べます。

のように使います。

さて、大部分の副詞は、語尾が-eで終わっているという特徴がありますが、これを「派生副詞」と言います。それに対し、語尾が-eで終わってない副詞が三十個ほどありますが、これを「原形副詞」と言います。これは、文の中で大切な働きをします。

※　※　※

主な原形副詞を三つに分けて少し説明しましょう。

（1）時に関するもの

ankoraŭ　まだ　hieraŭ　昨日　hodiaŭ　今日　morgaŭ　明日

baldaŭ　間もなく　jam すでに、もう　ĵus たった今　nun　今　tuj　すぐに

（2）程度を表すもの

apenaŭ　かろうじて　preskaŭ　ほとんど

tre　たいへん、とても　tro　あまりに～すぎる

（3）特別なもの

次のものは、名詞や代名詞も修飾します。直後におかれた単語を修飾します。

almenaŭ　（少なくとも）～だけは　ankaŭ　～も

eĉ　～さえ　nur　～だけ　（横山　裕之）

Hejmpaĝo de HEL　HELのホームページへようこそ
ESPERANTO版 http://www5d.biglobe.ne.jp/~hel/index.htm
日本語版　http://www5d.biglobe.ne.jp/~hel/jp/index-j.htm

先住民族情報誌TAMTAMOの日本語訳、進んでいます。

真鍋俊行さんのホームページをHEROLDO DE HELで紹介したときにアドレスを載せ忘れていました。すみません。

http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Sirius/1557/　です。

Danke ricevitaj　－受領郵便物－（星田淳　扱い－読みたい方はご連絡下さい）

＊受講生通信　第84号，2002-09-07，沼津エスペラント会，B5X10 頁のうちＥ文２頁強。催し欄に第66回北海道大会予告。ザメンホフ演説で ĉiuj に続き個々人については li を使っているが? に対し、「li は中性の代名詞でもあると考えれば」とのコメント。

＊La Tamtamo: 第 339号(2002 年10月，Jokohama Esperanto-Rondo(JER),A4 X 4頁、日本語。読書会報告は R. Schwartz の短編集 Vole････Novele，好評。ブラジルＵＫ体験連載開始。「日本に言語問題はない」「北海道では？」と質問があったという。

＊Novajoj Tamtamas: N-ro 185,Oktobro 2002，Jokohama Esperanto-Rondo(JER). A4X4頁、全文Ｅ. Raportojは３ページにわたって Fortaleza UK の記事と写真。

＊受講生通信　第85号，2002-11-01，沼津Ｅ会，B5X12 頁のうちＥ文２頁半。札幌から女性２人：菅原路子さん「Ｅ語の目的というものに惹かれています」、藤原佳世さん「ただ今９ヵ月、胎教にもよいと思って学びます」。福岡の秋吉さんから「高杉一郎著『往きて帰りし兵の記録』はエスペランチスト必読の本」と。

＊La Tamtamo: 第 340号(2002 年11月，JER,A4 X 4頁、日本語。Privatの Karlo 監修に当たって（柴山純一）は多くの謎解きを提供。

＊PONTETO:Novembro 2002　N-ro 196:関東エスペラント連盟(ELK):B5X 12頁のうちＥ文４頁。十月の八が岳合宿の記事、写真が９頁。帯広にも来たベトナムのS-ro Tran Quan Ngoc さんの参加で盛り上がった様子。

＊VOJO SENLIMA;N-ro 155,Novembro2002 熊本エスペラント会．B5 X12頁、のうちＥ文５頁、そのうち４頁は野村忠綱さんが日本大会の Ossaka-Simpozioで報告した全文。

＊センター通信：2002年11月25日、N-ro 234、B5X12頁のうちＥ文４頁、内３頁は Jagi Fuzio（八木富士雄，filo de iama UEA-prezidanto JAGI Hideo)の、ギタリスト・セゴビアについてもの。

＊Novajoj Tamtamas:N-ro 186,Novembro 2002,JER，A4X4頁、全文Ｅ．日本大会参加後各地をまわったサマルカンド平和博物館の S-ro Anatoli Ionesov と、１２月の神奈川ザメンホフ祭との、記事と写真。

＊Eskalo　第98号(2002 年第５号)、2002年12月11日、川崎エスペラント会、B5X6頁のうちＥ文１頁。

＊NOVA VOJO:2002.12:N-ro380 decembro A5 X32頁中Ｅ文約９頁．大本エスペラント普及会(EPA）発行

＊SFERILO:変形Ａ４版１枚２頁。 SFERO (San Francisco Esperanto Regional Organization) 発行、１月例会（ザメンホフ祭・新年）予告号。"Rompu, rompu la murojn!"(Bill Harmon)が１月のFest-parolado.

＊La Vulkano: N-ro 143, Vintro　2002：LA　ORGANO　DE　HUKUOKA ESPERANTO-SOCIETO:B5 X 8頁中E.文２頁。クロアチア物語(Spomenka Ŝtimec，森真吾　訳）が連載中。

＊La Tamtamo: 第 341号(2002 年12月，JER,A4 X 4頁、日本語。日本大会後のイオネソフ氏の講演会実施報告

＊KONGRESA OPERACIARO
2002.12.20　百周年JEI 委員会事務局発世界エスペラント大会開催に当たっての手順書。時系列に沿って１６５項目。

＊受講生通信　第86号，2003-01-01，沼津Ｅ会，B5X12 頁のうちＥ文２頁弱。札幌の菅原路子さんの学習報告。

＊La Movado N-ro 623 jan. 2003, KLEG（関西エスペラント連盟）など４地方連盟の共同機関誌。B5 X16頁の内Ｅ文は計４頁。Salonoにトルストイの Resurekto（復活）所感。帯広のチャン・クアン・ゴクさん歓迎会、市国際交流課の情報誌「エスペラント」の記事も。

ENHAVO

Paĝo1 Naskiĝis Esperanta klubo en Zimbabvo

2 TIRI Masiho kaj Esperanto *JOKOJAMA Hirijuki*

7 Ĉasista rakonto *KABAYAMA Yûsuke*

8 Ĥabarovskaj pentristoj Mihail KORĈMARJOV

10 Fotoj de la 66a kongreso

12 Germana matematikisto, s-ro Frank Stephan en Sapporo *GOTOO Yosiharu*

13 Zamenhofa festo de SES

14 Kunsido por bonvenigi amikon el Vjetnamio, la lando de poemoj kaj bambuoj *SAWAYA Yûiti*

16 Malmultenombraj popoloj de la Rusia Fora Oriento en la dialogo de kulturoj *Valerij PARAVIN*

18 Lerna paĝo *JOKOJAMA H.*

19 Danke ricevitaj *HOŜIDA Acuŝi*

目次

1 カピンガ＝ントゥンバさんたちが、ジンバブエでエスペラント団体を立ち上げました。

2 知里真志保とエスペラント （横山 裕之）

6 狩人ものがたり
（原文：知里真志保、エス訳：樺山 裕介）

7 2003年新春講習会 （樺山）

8 ハバロフスクの画家たち（ミハイル＝コルチマリョフ）

10 第66回北海道大会写真集

12 ドイツの数学者フランク＝ステファンさんの札幌来訪 （後藤 義治）

13 札幌エスペラント会のザメンホフ祭

14 詩と竹の国 ベトナムより友をむかえて チャン＝クアン＝ゴクさんの帯広訪問 （沢谷 雄一）

16 極東ロシアの少数民族 （ヴァレリー＝パラヴィン）

18 学びのページ 副詞 （横山）

19 受領郵便物 （星田 淳）

訂正 93号P4「魚衣連」(yu yi lian)→(yú yī lián)

Anoncoj お知らせ

★ 2002年11月24日、富良野市山部にある大本北海本苑で大本の感謝祭がおこなわれました。この集会で佐藤不二雄さんがエスペラントのさわりを指導し、190人がエスペラントを一斉に発声しました。大本エスペラント普及会北海支部の本格的な始動が待たれます。今年の5月合宿はこの北海本苑でやります。エスペラント北海道大会の記念すべき第一回はここでおこなわれました。

★ 苫小牧エスペラント会の総会とザメンホフ祭は、2002年12月21日、アイビープラザと居酒屋「津軽屋」でありました。そして苫小牧での新年会が1月25日(土)17時から星田宅でおこなわれます。会費1000円です。

★ 図書の次回発注は4月末をしめきりにして送ります。受け付けた本は5月合宿のときに受け取ることができます。（電話・ファクス 011-717-4189 〒001-0045 札幌市北区麻生町1-13-3 宮沢直人）

★ 1月13日の第3回委員会は風邪の流行もあって集まりが悪く、星田、宮沢、佐藤英治、樺山のみで、情報交換をしました。次の第4回委員会は3月1日(土)17時からロンデタージョ（上記宮沢宅と同じ）でやります。

Heroldo de HEL 第94号（2003.1.19）
北海道エスペラント連盟機関誌
編集 〒076-0024 富良野市幸町2-20-A
樺山 裕介
電話・電送 0167-23-5772
電子メール kabaty@fa3.so-net.ne.jp
投稿歓迎

年会費：正会員3000円 家族会員1000円
青年会員（25歳以下）1500円
購読会員 2000円
郵便振替口座 02700-6-17075
「北海道エスペラント連盟」
入会歓迎